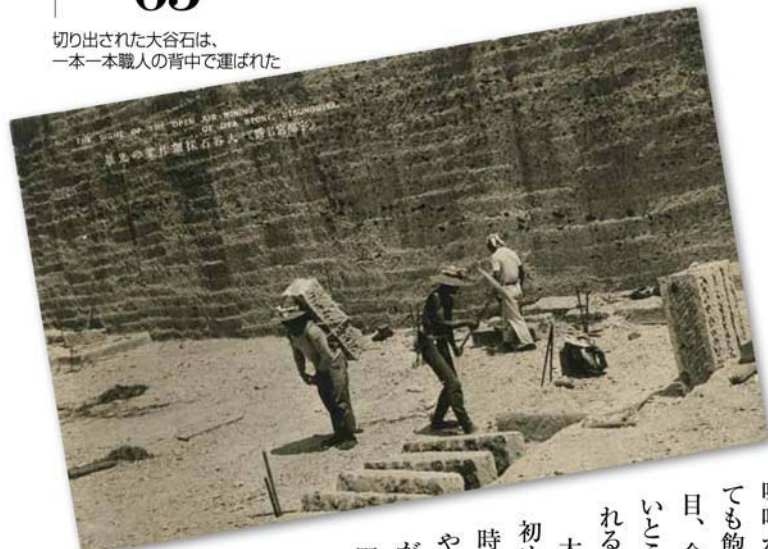


Once upon a time in Utsunomiya

## 一枚の絵葉書から 石井敏夫コレクションより

第63回

切り出された大谷石は、  
一本一本職人の背中で運ばれた



# 大谷石

大谷石の名称で広く知られるこの石は、流紋岩質角礫凝灰岩と呼ばれる火成岩の一種で、今からおよそ二千万年前、地球の創成期である新生代に繰り返し返された海底火山の爆発によって形成された。

一目見ただけではどれも同じに見える大谷石であるが、石の種類、色合い、風味はさまざま。以前は大谷石を色合いから白目、青目の二つに分け、その中に含まれている石味噌（大谷石の中に含まれている茶色い斑点）の大小に

よって等級が付けられていた。しかし、採掘が露天掘りから地下に移る大正年間になってからは、今までの露天掘りの時にはなかつた石の粒子が細かく、石味噌が非常に少ない層が発見され、今まで色合いに頼っていた分け方から石質を基にした分け方へ変わった。

この大谷石は細目と呼ばれ、加工しやすく仕上がりがきれいなことから、今では大谷石の代表となつた。この他にも大谷石には、石味噌があり堅牢で長く見ても飽きがないといわれる荒目、今ではほとんど産出しないところから「幻の石」と呼ばれる虎杓などがある。

大谷石が建築資材として初めて使われたのは、古墳時代に遡る。切り石積みや石棺にそれを見ることができ、奈良時代には下野国分寺、国分尼寺の土台石にも使われた。また、江戸時代に入ると「釣り天井伝説」で知られる本多上野介正純の宇都宮城郭普請などに使われ、やがては鬼怒川の水運



巨大な石の壁に石切り職人の姿が小さく見える。露天掘りの光景

によって遠く江戸まで運ばれた。正純が大谷石を切りだした地域は今でも御用山と呼ばれている。

大谷石が建築資材として脚光を浴びるようになったのは一九三二（大正十二年六月）に竣工した旧帝国ホテルの内外装に使われてからのこと。その翌年九月一日、突如、東京地方を襲った関東大震災の際、アメリカ人建築家ライトによって設計された同ホテルは大谷石の耐震性、耐火性によってほとんど被害を受けずに済んだからである。

採掘が原始的な手掘りから機械化が進み、運搬手段が整備された一九七二（昭和四十六）年のピーク時には八十二万トンの生産高を誇った。手掘り時代に一人の石切り職人の採掘量は、一日で十二本程度。百五十キロある石を、背負子を使い人力で搬出したというから過酷な労働環境であったことがうかがえる。